

寄稿

2012年12月26日(水)、27日(木)の2日間、東京大・福武ホール内福武ラーニングスタジオにて実施された、ポスト3.11 高校生未来プロジェクト『学び』がボくらを、社会を変える」の企画協力者である苅谷剛彦先生から、学校実施型という新たな展開にあたって寄稿いただきました。

「高校生未来プロジェクト」が示す、更なるターゲット

オックスフォード大教授／元東京大教授 苅谷剛彦

社会と自分の学びとのつながりを意識することで、高校生の学習意欲はどのように変化する可能性があるのか。そのような課題意識を持って、私は「高校生未来プロジェクト」の企画段階からかわり、また2012年12月に全国から応募した高校生を対象に東京大・福武ホールで行われたワークショップにも講師として参加した。その時から感じていたことは、こうした特別の場を超えて、同じような試みが学校を単位にしても実行できるか、という課題であった。更には、学校に場所を移すことで、日本の高校教育が抱える問題も浮き彫りに出来ると考えていた。その後の「高校生未来プロジェクト」の展開は、まさにその点での実施の試みであった。その成果を判断するためには詳しい調査報告を待たなければならないが、今回、この試みに参加した生徒や実施を担った教師の発言から浮かび上がる論点について考えてみたい。

第1に、可能性が開かれた（少なくともそれが示唆された）ことである。実施する学校側が解決すべき問題（教師たちの負担や、時間のやりくり、外部のファシリテーターとの協力関係など）は残るにせよ、学校という場においても通常の授業や進路指導とは異なる話し合いの場を設定することで、生徒たちの意識の変化を引き起こす可能性が示された。特に通常の学校で実施することにより、「生徒同士、普段真面目な話をする機会がない」「真面目な話をすることに消極的になっている」生徒たちの関係を切り崩す可能性も示された。恐らくは、そういう場面に立ち会うことによって、教師たちの側にも旧態とした授業でのコミュニケーションのあり方の限界に気付く機会を提供できただろう。その意味では、教師と生徒との関係にも変化を起こす契機が含まれてもいる。このような関係の変化は、授業の中でのコミュニケーションのあり方をも変えていく（「正解」を求める上下の関係から、思考の展開を求める

開かれた関係へ）可能性を秘めている。

第2に、可能性の裏返しとして、高校での教育と学習の課題も浮かび上がった。今回のような機会がなければ、生徒たちは真面目なテーマで語り合うことをせず、授業でも、自分の頭で考え、それを言葉にする機会が少ない。教師も余裕がないため、そのような機会をつくれぬ。それが日本の高校教育の「日常」だとすれば、そういう教育の機関・期間を通して一体どんな人間が育つのだろうか。

正解のない問題の多くは、実は生徒たちの将来の生にとっても重大な問題であり、耳を塞ごうと目を閉じようと逃れようもない地球大の大問題や、よりよく生きるためには避けて通れない、人間にとっての重要課題である。日本の高校教育は、そういう問題に立ち向かうことから生徒を遠ざけ、学習を消化している面もあるのではないだろうか。他の先進国であれば、少なくとも大学に進学するような生徒たちの中では、普段の授業を通じて当然身に付けている討議する力（他者の意見を理解しつつ、知識を基に自分の考えを組み立て論理的に発言できる能力）を、日本の高校はまだ十分育てられているとはいえない。そういう教育の現状を今回の学校実施型の取り組みは浮かび上がらせたのだ。

そう考えると「高校生未来プロジェクト」の更なる課題は、地道に学校レベルでの実行可能性を探ると同時に、そのプロセスを通じて、このような改善すべき喫緊の課題を出来るだけ多くの教師や生徒たち、そして行政を含む教育関係者に気付かせる機会となることである。学びの意欲を高めた先に、もう1つ大きな照準がある。学校への普及の過程で直面する困難さの中にこそ、未来に向けた高校教育の課題が如実に示されているからである。

